



CONTENTS

巻頭寄稿	1
研究活動の紹介	2~3
公開講座紹介	4~5
特別公開講座「ロウソク能」	6
日伊喜劇の祭典	7
室内楽演奏会	7
静岡国際オペラコンクール	8
SUACデザインセミナー	8
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
 ●Tel: 053-457-6113 ●Fax: 053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t s & C u l t u r e



学長
川勝平太
 Heita Kawakatsu

地域の文化芸術プロデュースの “センター(中心)”に

本学の建学の父が、幻の初代学長・高坂正充先生と初代学長・木村尚三郎先生だとすれば、建学の母は、県・市・地元経済界ですが、人物を一人あげるとすれば、石川嘉延知事でしょう。本学は「公設民営方式」の形態をとっていますが、「公設」の中身は、インフラ整備は浜松市と静岡県に、毎年の経常費は県に大きく依存しています。県代表の知事が本学の理事長であることは、県民全体の支持のシンボルであり、その重要性はしっかり認識しておかねばなりません。

すなわち、本学は「私立大学」として自主運営をしていますが、その基礎として、建学の父から運営の精神(=文化力の向上)を、建学の母からは運営の糧(=年間10億円余の補助金)を仰いでいることを、夢忘れてはなりません。

今年の三月中旬、本学理事長と歓談の機会がありました。理事長は、知事の多忙で、入学式・卒業式を除けば、いや、そのような式典のときはなおさら、じっくり話す機会はありません。小生が本学に赴任してから、理事長と歓談したのは今回で二度目です。一度目は歓迎会。今回は赴任してほぼ一年が経過し、話の中身は本学の運営にかかわるものでした。その理事長が特段の期待を表明されたのが、本学の文化・芸術研究センター(以下、本センター)でした。期待が高いというのは、現状が期待以下だということであり、端的には、本センターに対する厳しい批判の表明であった、と受け止めています。

本学の使命は、ひとつは、地域密着型の大学になることを通じて地域力の拠点になることです。もうひとつは、文化芸術の振興を通して文化力を体現することです。学部・大学院も本センターも、その点では、同じ使命を担っています。

しかし、学部・大学院と本センターとでは、おのずから役割が異なり、「すみわけ」が必要です。

学部・大学院は、事務スタッフと力をあわせて、教員と学生の研究・教

育の質をあげる場です。

では、本センターはどうでしょうか。「両学部の連携・研究成果の共有」があげられています。それは本センターというより、学部・大学院の課題です。

もう一つ、「開かれた大学としての交流拠点」という役割があげられています。これを制度化するのが本センターの課題ではないでしょうか。浜松市、遠州、広くは静岡県の文化芸術関連団体と連携して、名実ともにアート・マネジメントの拠点になることです。そのためには、何よりもまず地元浜松の支援を仰がねばなりません。本学が浜松市、地元経済界、地域住民とともに文化芸術を振興する、それが本センターの役割です。

本学が、県のみならず、浜松の市当局・経済界・住民の支援で建学されたことを改めて想起したい。浜松の市当局や経済界から巨額の経常費は期待できませんが、本センターのためならば、すなわち文化芸術による地域振興のための折々のイベント、コンサート、祭、「音楽の都」づくりプロジェクト、大学街プロジェクト、文化創造都市推進プロジェクト等のためには、支援を仰げます。本センターが、地域のための、地域の人々の支援の受け皿になれるような制度設計が急務です。

理事長との会談の一週間余り前の3月2日、東京の勝鬃橋の第一生命ホールという瀟洒なコンサートホールでの、ロベルト・シューマン、クララ・シューマンの作品の室内楽演奏会の招待状を平野教授がくださり、参上したところ、驚いたことに、プログラムに「静岡文化芸術大学主催」とありました。入場券4千円の会場は満員。小岩准教授によるロベルトとクララの恋愛と結婚のエピソードと作品解説があり、19世紀前半にベートーヴェンが使ったといわれる古楽器のピアノ(浜松市楽器博物館所蔵)を用いて、プロの音楽家が演奏しました。クララ・シューマンのピアノ協奏曲の室内楽編曲版の演奏は本邦初演で、会場には東京の音大の重鎮の顔も見え、演奏会は大成功でした。気づけば、会場整理や受付にいた若者は、本学の学生です。これこそアート・マネジメントのモデルです。もうひとつ、2001年から実施されている薪能(今年度は「ロウソク能」)も梅若教授と学生が献身的な努力をしています。

古楽器コンサートにしる、薪能にしる、外部の芸術家を本学のスタッフと学生が支えています。それは教育効果もあり、文化芸術の振興でもあり、このような試みをしっかりとプラットフォームに乗せなければなりません。伊藤・須田・大倉の三教授による研究成果「静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターのありかた」(2006.3.22)なども参考に、本センターが、県はもとより、主には地元の浜松の市当局・経済界の支援の受け皿になって、地域の文化芸術のプロデュースを受け持つ「センター(中心)」になるのがよいのではないかと、そのように考えます。

(平成19年度 センター長特別研究)

ユニバーサルデザインの 地域での実践に向けて

古瀬 敏 (デザイン学部空間造形学科)

静岡県がユニバーサルデザイン (UD) を施策の重点に置こうと懇話会を立ち上げ、ユニバーサルデザイン室を設置してから10年経つ。この間さまざまな動きがあった。浜松市を始めとしていくつかの自治体は静岡県にならってユニバーサルデザインを推進しようとした。推進計画を立てるのが基本的な対応だが、ユニバーサルデザイン条例を制定したところもあり、それなりの成果も上がっている。しかし一方で限界も明らかになってきた。いちばん難しいのは、UDがビジネスセンスでも最重要、という米国流のアピールが、とくに地方の民間レベルではうまく機能しないことだろう。この点を解決するにはどうすればいいだろうか。

公的建築・施設のありようとそれらを核としたまちづくりという切り口は、自治体の予算とそれを使っての実行とが両輪となって、かなりの成果を挙げている。新築の場合は当初からユニバーサルデザインに基づく設計を当然のこととしており、その意図はほぼ達成されつつある。これは1994年のハートビル法施行から10年以上経っていること、さらに国土交通省から官庁営繕建築物のユニバーサルデザイン指針が出されていることの効果であるといえよう。

新築に比べると、既存建物・施設についてはもちろん制約が多く、改修されても十分な水準に達することができない場合も少なくない。もちろん、最大の課題は予算措置である。本学のある浜松市では、政令指定都市になるに当たって周辺自治体と合併した結果として自治体が管理する建築物が一気に増えたこともあるのだろうが、すべての所有建築物をユニバーサルデザイン対応で改修するためには130年かかるという試算がなされたようだ。つまり意向はあっても、実質的には建て替えまで指をくわえて見ているだけということも生じてしまうということだ。しかし、自治体は市民の税金が財源なので、どれを先行させるかという優先順位に関する議論はきちんとなされるはずで、そうでなければ市民の税金を預かって最適の政策を実行する役割を委ねられているという自治体の本来の意味がない。

翻って純粋な民間では、一部の建物種別を除くと、なかなかハートビル法施行の効果は浸透していない。法律が義務として効力を発揮するようになったのは2003年の法改正施行のあとであり、

景気のこともある、なかなか進展ははかばかしくない。無理押ししようとする、ユニバーサルデザイン対応するよりは撤退を選ばれてしまう危惧さえある。その結果は生活水準の低下に直結するので、ハードとソフトの組み合わせでよりよい解答をもたらすにはどうしたらいいか、バリアフリー新法に基づく条例で一律に要求するのは異なった手法を含めて、ぎりぎりの攻防が行われる場面も出てこよう。

さらに、建物・施設やまちづくりに関わらない、製品などのユニバーサルデザイン化については、そうしたものが最終的に消費者に受け入れられて初めて意味を持つが、売れて利益が上がらないことにはどうしようもなく、自信を持ってない段階ではとても市場投入はおろか、そういう可能性に賭けて商品開発に取り組むことさえなかなか手がけるまでに至らない。

おまけに、たまたま消費者に受け入れられるヒット商品が出ると、大企業がそれを見て間髪を入れずに改良品を市場に投入してしまうこともあって、それでは採算が取れないとよけい尻込みする。

こうした事態は最悪であり、他企業との関係を考えることなく、とにかく自分たちがやらねばならぬことをきちんとやるという意識を醸成することが最優先課題であろう。このために必要なのは、すべての市民、そしてすべての組織(官民間問わず)の構成員がユニバーサルデザインの本質を身体で理解することにある。そこで、小学校からユニバーサルデザイン教育が必要だし、中学校、高等学校でもそれは同じである。静岡県、そして浜松市では小学校の段階からユニバーサルデザインを軸とした総合学習が行われるように全体として動いているので、学校での学習が逆に父母に問題意識を目覚めさせる形で少しずつ浸透しつつあるといえよう。ただしこの進行は緩やかであり、かなりの年月待たねばならないかも知れない。

特別研究紹介 2

(平成19年度 センター長特別研究)

メディアアート戦略に関する研究

長嶋洋一 (デザイン学部メディア造形学科)

1. はじめに

本学(SUAC)の特長である芸術文化マネジメント、デザイン学部のアートとサイエンス(技術と感性)の結び付いたメディアアートを、将来に向けたSUACの重要な柱の一つとして研究している。「文化と芸術」Vol.5で、2001年から2006年までの本研究テーマについて概観的に報告したので、本稿では最近の新しい状況の報告、およびこれからの研究の方向性について紹介する。

2. 「メディア造形学科」の浸透

開学以来デザイン学部「技術造形」学科であった名称が「メディア造形」に変更されたのは2006年である。既に学生の半数はメディア造形学科学生として新しい内容で学んでいるが、ここ1-2年、全国の大学で「メディア」を名乗る学科が新設されている状況からも、本学の先見性が立証されている。センター長特別研究として、この新学科にふさわしいテーマを研究すること、メンバーの教員自身が作家として「メディア造形」を具体的に体現すること、などから本研究はスタートした。その成果として、2006年・2007年の本学オープンキャンパスにおいて、大型24面ディスプレイによる映像作品上映展示システムを開発して注目され、また色々なメディアアート作品の展示(来場者も体験)により、学科の特長を受験生や市民に広くアピールする、という目的を果たすことができた。

3. コンペ入選などの成果

研究論文の学会発表と異なり、メディアアート作品の制作についての客観的評価というのは難しい側面があるが、「コンペに入選する」という客観的事実によって、本研究プロジェクトの成果、および本学のメディアアートへの評価を確認できるトピックが続いたので、ここでまとめて報告する。

2006年12月22-25日に開催したメディアアートフェスティバル(MAF)2006において発表/展示した作品では、学生作品として山口翔(3回生)のインスタレーション作品「風見屏風」(写真1)が、NHK



写真1

「デジタルスタジアム」に入選した。またプロジェクトメンバーである教員の作品では、的場ひろしのパフォーマンス作品「映像と身体のコポジション」がSIGGRAPH2007に入選してサンディエゴで公演され、長嶋洋一のパフォーマンス作品「Cyber Kendang」(写真2)がNIME2007に入選してニューヨークで公演された。

2007年のMAFは8月のSUACオープンキャンパスの時期に同時開催したが、ここではNHK「デジタルスタジアム」に入選した学生映像作品として山口翔(4回生)の「Paper Play」と鈴木絢(大学院デザイン研究科1年)の「アタマノナカノカイツ」を上映展示した。また嶋田晃士(大学院デザイン研究科2年)が展示発表したインスタレーション作品「kodama」(写真3)は、アジアデジタルアートアワード、およ



写真2



写真3

び文化庁メディア芸術祭学生CGコンテストの両方に入選した。さらに嶋田晃士の映像作品「絵画のキセキ」、山口翔の映像作品「Paper Play」は、他にも映像系のコンペ数件に入選し、山口翔の卒業制作映像作品「trip」も、いくつかのコンペ入選とNHK「デジタルスタジアム」ベスト賞を受賞した。

4. MAF2008、さらにメディア造形の未来へ

文化芸術研究センター長特別研究テーマ「メディア造形の未来」は、引き続きMAFを企画・開催するとともに、新しいテーマとして、「コンテンツ産業への展開」を研究することを目指している。これは、経済産業省・文部科学省・文化庁などがそれぞれ、「21世紀の日本を支えるのはコンテンツ産業である」という視点からいろいろな振興策を展開していることに対応して、SUACから発信するメディアアートが、地元の産・官といかに連携していくか、を調査検討するものである。これが同時に「メディア造形の未来」の研究である、という視点でプロジェクトをさらに進めていきたい。

参考URL

- [1] <http://1106.suac.net/news2/installation/index.html>
 [2] <http://1106.suac.net/news2/installation2/index.html>
 (ページ内に過去のMAFページへのリンクあり)

(平成19年度前期公開講座“もてなし”の文化学Ⅱより)

デザイン都市へのアプローチ

～もてなしのデザインと都市づくり～

黒田宏治 (デザイン学部生産造形学科)

先端のデザインが競演するパリコレのファッションショー。シンプルでカラフルな北欧のインテリアや生活雑貨の数々。デザインという言葉から思い浮かべるのは、そんな華やかな風景かもしれませんが。確かに流行のファッションやインテリアも、デザインであることに違いありません。でも、それだけがデザインというわけではありません。

デザインの対象は、身のまわりの道具や各種製品などのプロダクト領域(立体物)、主に視覚的な情報伝達を担うビジュアル領域、そしてスペース(空間)の3領域に大別されることもしばしばですが、実際には専門性に即して細かく分けられます。クラフトデザイン、ジュエリーデザイン、製品デザイン、ファッションデザイン、テキスタイルデザイン、パッケージデザイン、グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、WEBデザイン、サインデザイン、ディスプレイデザイン、インテリアデザイン、建築デザイン、ランドスケープデザインなどなど。片仮名ばかりが連なり、一般には馴染みの薄い分野もあると思いますが、言葉の数からも相当多岐にわたることは推察いただけるでしょう。

英和辞典でデザインdesignを引くと、図案や意匠を意味する名詞形のほか、設計する、計画する、企てるといった意味の動詞形があるのを確認いただけると思います。ファッションやインテリアはじめ多様な対象領域の造形や色彩だけがデザインなのではなく、そこに至る企画や設計のプロセスもまたデザインなのです。端的に整理するならば、図案や意匠といった名詞形のデザイン、これを狭義のデザインといたしましょう、一方で企画する、設計するといった動詞形のデザイン、これを広義のデザインと呼ぶこととしますが、デザインには大まかに2種類の概念が重なっているわけです。そして、広義のデザインこそ一義的であるわけで、そちらにも注目いただき、認識を新たに願えたらと思います。

ちなみに狭義は広義のプロセスの成果、正確には成果の一部ということになりますでしょうか、実体化といっても必ずしも姿形を伴うとは限らないわけですから、そういうことになるでしょう。そのような広義のデザインには、構想力、造形力、調整力の3つの力が備わっています。構想力は問題解決の方向を発見・構築する力であり、造形力は実体化の姿形を描く力であり、そして調整力

は実体化にかかわる諸分野・諸機能の集約化、コーディネートを担う力です。それらの総合力がデザインということになるわけです。

そのようなデザインのダイナミズムを都市づくりの中軸に据えること、それがデザイン都市の発想です。国際色豊かな都市が国際都市、ものづくりの技術や生産力が集積する都市が工業都市、大学や高校などを核に広がる都市が学園都市と呼ばれるような意味で。違いがあるとすれば、国際交流施設やハイテクの研究所や工業団地、大学のキャンパスに対比できる中核的施設が必ずしも存在しないことでしょうか。ともすれば美しい街並みが連なり、魅力的な商品や情報が店先や街角に横溢するように捉えられがちですが、それらはあくまでデザイン都市の表層であり、それを支えるダイナミズムがデザイン都市の要です。そこに浜松という都市の目指す一つの方向があると思っています。そして、そのダイナミズムと情報発信力が浜松における「もてなし資産」ということになるでしょう。

まずは産業の営みがデザインのはたらきを活かせるかたちに編成替えをできないだろうかと考えています。別に産業構造転換とか大げさな話ではなく、意識改革といった方が近いかもしれませんが、様々な産業の担い手がデザイン、特に広義の意味でのデザインへの理解に一歩近づくことが出発点と断言していいでしょう。必ずしもデザイナーなどデザインの当事者たちの活躍にだけ期するというわけではなく、パートナーシップの下地があれば、そもそもデザインには調整力が備わっているわけで、デザインの営みが触媒になることにより、クリエイションの芽がそこかしこに頭をもたげることになるでしょう。

デザインの営みは、周囲に刺激されてこそ研鑽され、持続されるものです。身近な市民であり、生活者がデザインの産業側に有意な刺激を与えること、ニーズをぶつけ、財・サービスを見立て(評価し)、優れた提案や価値創出を受容できること、市民のデザイン感度といってもよいでしょうか、プラスに作用するフィードバック回路が都市に内在することは、デザイン都市にとって欠かせません。そこにデザイン系大学の存在意義も求められるところです。私どもの大学にはデザイン学部もありますが、浜松のデザイン感度を醸成していく役割も意外と大きいのではないかと考えています。

公開講座紹介 2

(平成19年度後期公開講座)

東アジアを知る

本学の公開講座は秋に行う前期講座(国際文化学科以外の学科教員担当)と秋から冬にかけて行う後期講座(国際文化学科教員主体)がある。今年度前期は「もてなしの文化Ⅱ～深みのある暮らしのために～」を総合テーマとして、小岩信治准教授(芸術文化学科)、黒田宏治教授(生産造形学科)、谷川眞美准教授(芸術文化学科)、横山稔准教授(空間造形学科)、阿蘇裕矢教授(文化政策学科)が担当した。

後期は2007年11月17日に開講し、2008年1月26日に閉講した。今般は後期講座について具体的に述べることにする。今年度の総合テーマは「東アジアを知る～新しい時代のために～」であった。東アジアの国々は儒教文化圏、漢字文化圏などともいわれるが、政治体制も違い、社会的経済的にもかなりの位相差があり、これまでは独自の展開をしてきた。しかしこの数年来、韓流・華流といわれる映画や音楽が日本をはじめとして東アジアを駆けめぐり、日本への訪問者も激増した。インターネットや衛星放送を通じてリアルタイムで他国の出来事を知る時代ともなったのである。食料や農産品、工業生産、製品販売等々いずれをとってもいまや好むと好まざるとに関わらず相互に協力しなければ成り立っていかない関係になっている。おりしも東アジア・東南アジア諸国間でFTA(自由貿易協定)やEPA(経済連携協定)が結ばれようとしている。

それではわれわれの東アジアは将来、EUのような共同体の形態をもつことに至るのかどうか、そのような形が最適なのかどうか。こういうことを展望するためにはそもそも東アジアにはどのような文化体系が存在しそれらの共通点と相違点は何かなどについて知らなければならぬだろう。国際文化学科の研究者という立場から、さまざまな切り口で「東アジアを知る」手がかりを提供し、受講者の皆さんとともに考えてみようとしたのがこの講座の趣旨である。

山本幸司教授は「中世における東アジアネットワーク」と題して、400年以上前の日本は実は非常に開かれた社会であって、中華世界をはじめアジアとは自在に交流していたことを明らかにした。孫江准教授は「世界地図に見る『東洋』」のタイトルで、「大西洋」はあっても「大東洋」がないのはなぜかと問い、地理概念の変遷をたどった。広



山本教授の講座

須田悦生(文化政策学部国際文化学科 公開講座運営部会長)

瀬英史准教授は「日本語はおもしろい!」と題するもので、世界の日本語学習者の6割以上を占めるアジアの人たちに日本語で表現することがどんなに魅力的かということを発信したいと語った。林在圭准教授は「韓国の伝統的食生活」というテーマで、「食」の視点から韓国の社会と文化の特色と思考方法、隣国日本との異同を説いた。岡田建志准教授は「ベトナムの文化～言葉と文字の歴史から探る～」と題して、ベトナムという国とベトナム語の歴史、それを表す独自文字と漢字漢文との共存を話した。そしてローマ字化へと進んだ結果、漢字由来語はあっても漢字がない状況だと述べた。



岡田准教授の講座

次からは1月に行われた講座である。馬成三教授は「『東アジア共同体』は実現するか」という題であった。中国外交にも詳しい馬教授はさまざまな資料を駆使しながら、長期的にはそのような方向に行くだろうが、一気には無理であること、まず日中韓の相互信頼を深め、相互利益を拡大させていくことから行わねばと説いた。最後に須田が「東アジアと日本～芸能の視座から～」の題で話した。日本の宮中や春日大社、四天王寺などで演奏される雅楽・舞楽はいかに東アジア(南アジアとも)と密接に関わっているか、能・狂言・人形劇もアジアの芸能を見なければ真の理解はできないことを説いた。

講師の皆さんの積極的な協力のお陰で、前期、後期ともに大いに盛況であった。年々、熱心な講座ファンが新しく増えてくるのは大変に心強い。イクステンション(公開講座)は市民に向けた、いわば大学のアンテナショップのごときものであるため、今後も改善を加えながら強化されることが望まれる。

2008年度は詳細未定ではあるが、前期講座は今年度の継続テーマ(「もてなしの文化ⅡパートⅢ」)で実施されるはずであり、後期は「多文化・共生」をテーマとした講座が予定されている。

例年の講座のほか、この秋には静岡国際オペラコンクール本選が浜松で開催されることになっており、本学にはその事務局が置かれていることもあって、特別講座としてオペラ関連のものも考慮されていることをお知らせしておきたい。

ロウソク能に至るまで

＜初代薪能プロジェクトチーム2001年の思い出、苦労話、等々＞

梅若猶彦 (文化政策学部芸術文化学科)

○初代薪能チーム

2001年、「第1回薪能学生チームへの参加募集一、薪能をプロデュースしてみませんか?」という半ば「口こみ」で募集した結果、集まった学生はたったの3名という惨敗ぶり。取り敢えず組織として認知できないこの少数若干名を「組織」と考え、代表をそこから1名選出し、その下に運営部、広報部、舞台制作部を置き(代表は兼務することになりますが)、こうして一応の体裁を整えようとしたのです。これが3名で構成する初代薪能チームの組織構造でした。

応募学生が極めて少なかった事実以外にも、第1回公演の運営を困難にしたことがあります。それは丁度この年にニューヨーク、マンハッタンにあるDIA Foundationでの能公演、「屋島(弓流、素働)」(10月3日～6日)が決定されていたことです。海外公演が連悪く薪能公演準備期間と時期的にバッティングしていました。

○本学薪能と海外公演

ニューヨークの能公演は写真家の杉本博氏が舞台制作を担当するなど、それ自体は非常に有意義な企画でしたが、何せ「9.11同時多発テロ」から1ヶ月経っていない時期でもあり、公演は独特の雰囲気(観客席側から醸し出される雰囲気)の中で行われました。話が前後しますが、忘れもしない日本時間の「9.11」の夜中に、DIAと日本側の実行委員会、それと私で、公演自体を中止するかどうか国際電話で話し合ったのです。しかし、当時のジュリアーニ市長は「公演はするべきで、テロに影響されるべきではない」という意見で、DIAもそれに従った形になり、実行することになりました。DIAの屋上でオープングレセプションを行う予定が、貿易センタービルの瓦礫から未だ煙が立ち上っていた時期でもあり、屋上からその瓦礫が見えてしまうことからレセプションは中止となりました。その光景を前にシャンパンで乾杯という気分には誰もなれなかったのです。

○ケネディ空港から学生と国際電話

公演終了後、ロンドンに向かう飛行機を待つ間、ケネディ空港から大学に国際電話をかけました。相手は本学芸術文化学科の早川という学生で

筆者:「運営はうまくいっている?薪能チケットはどれくらい売れているの?」

早川:「現在250枚程度ですが、何とかなるかもしれません」

という風で、妙に明るい声でしたのでちょっと安心したのを覚えています。とにかく3名の学生のやる気と責任感には頭が下がりましたし、その精神は学生から学生へと、オーバーに聞こえるかもしれませんが、無形文化として受け継がれてきていると個人的には思っております。いつしか薪能チームを「現場」という意味で「薪修行」と呼ぶようになり

ました。

7年目を迎えた静岡文化芸術大学薪能は昨年「ロウソク能」という別の形体を取り本学講堂にて開催しました。

○本学で作上げた概念

筆者の狭い知識の範囲ですが、他大学にも「学生能」という企画があり、これは学生が鑑賞する能公演を、大学が企画する有意義なものです。しかし本学で言うところの、あるいは本学がその概念を作った「学生による「薪能」>は存在しません。もし他大学でこの種の「薪能」を実現させるためには、学生が少なくとも2ヶ月間(それも集中的な作業を前提として)大学内、或は事務所を別に借り、公演に関わる実務を引き受けなければなりません。これを引き受けてくれる学生を見つけるのは容易ではありませんし、時期としても現実的な選択肢としては夏休みしかないこととなります。遊び盛りの若者が夏休みを犠牲にして2ヶ月の労働を伝統文化の発展のためにしてくれるかどうかです。本学では既に7年間やってきてくれた訳です。

興味深いことにこの労働への何らかの報酬を学生側から要求することは、7年間一度もありませんでした。これは驚くべきことです。しかし大学として、考えようによっては延期されてきたこの労働への報酬を、学生が要求しなかった事実を踏まえて、本学だからこそそれを考える、或は今までの経験を軸に考えられる立場にあるように思います。具体的には、これはアーツマネジメント学科を持つ他大学も同様でしょうが、本学はこの労働を文化事業運営実習等の授業枠に組み入れることにより、それを単位という報酬に還元することが可能であり、それは学生の事業達成感の再確認となることでしょう。



ロウソク能 本学講堂にて(能「石橋」 赤獅子 梅若猶彦)

狂言と コンメデア・デッラルテ

イタリアの仮面即興劇コンメデア・デッラルテと狂言については、数年前から比較研究やワークショップ、合同上演などの試みがなされてきた。「日伊喜劇の祭典 狂言とコンメデア・デッラルテ」は、そうした経験を踏まえて企画された舞台公演である。また、日伊文化交流事業「イタリアの春2007」の催しの1つでもあり、本学を皮切りに名古屋、東京、京都、大阪など全国各地で行なわれた。

上演は3つの演目から構成されている。『濯ぎ川』は、西洋の中世喜劇を狂言師・茂山千作と劇作家・飯沢匡が狂言仕立てにしたもので、姑にいじめられた婿が仕返しをするという物語。次の『いたち』は、イタリア・ルネッサンス期の喜劇を翻案した創作狂言で、作・演出は関根勝。老商人のもとに逃げた妻を取り戻そうとする若者の話である。そして、最後の『Bilora』は、『いたち』の原作となったルザンテの喜劇のイタリア語上演で、井田邦明が演出、ミラノの劇団「アルセナーレ」の俳優たちにより演じられた。

『濯ぎ川』には国際的に活躍する狂言師・茂山あきらが出演、また、『いたち』では善竹十郎ら日本の狂言師と狂言の演技を学んだイタリア人俳優が共演するなど、



多くの点で興味深い公演となった。さらに、ルザンテの作品そのものについては、今回が本邦初演であった。しかし、実験的な舞台であるにもかかわらず、狂言本来の筋の分かりやすさ、台詞や身体表現の様式美、絶妙な笑いの呼吸などにより、一般の観客にも十分楽しめるものとなった。また、仮面を用いたイタリア人俳優のエネルギー溢る演技は、同じ喜劇でありながら洗練された様式美に支えられた狂言とは違う力強さを感じさせた。日伊の喜劇の伝統に見られる共通性と差異を探るうえで、きわめて貴重な機会になったと言える。

高田和文 (文化政策学部国際文化学科 ローマ日本文化会館館長)

[静岡文化芸術大学の室内楽演奏会3]

2008.2.23 アクトシティ浜松・音楽工房ホール
2008.3. 2 東京 第一生命ホール

クララ&ロベルト・シューマン ~グラーフのフォルテピアノとともに

2006年度から3年度にわたる演奏会プロジェクトが最終回を迎えた。これまで同様、浜松市楽器博物館が所蔵する19世紀序盤の歴史的ピアノ(フォルテピアノ)が提供され、小倉貴久子ほか19世紀の演奏慣習に通暁する世界的なプレイヤー計6名を迎えた。2月23日にアクトシティ浜松音楽工房ホール、3月2日に東京・第一生命ホールの同一プログラム2回公演で、演目はシューマン夫妻のピアノ付きアンサンブル作品およびピアノ独奏曲である。本稿を執筆しているのは浜松公演を数日後に控えた時点であるが、浜松公演では230席満席になることが確実視されている。東京公演についても、さまざまな音楽イベントが競合する日時でありながら、チケットの前売り販売枚数は前2回と同様のペースで伸びている。

これまでの実績が次第に認知され、また第3回最終回ということもあり、今回はこれまでで最も多様な広報が展開されている。まずクラシック音楽情報誌月刊『ぶらあぼ』2月号では、冒頭カラーページの中にあるトリトン・アーツ・ネットワーク/第一生命ホールの見聞き枠に、小倉氏と筆者の対談が掲載されている。また『音楽の友』2

月号の演奏会案内欄「スクランブルショット」にある紹介文は、Yahoo!音楽ニュースとしてインターネット上に配信されている。こうした情報媒体と連携しながら、とくに静岡県東京事務所や浜松市東京事務所のご尽力によってこの催しが広報され、本学の名前とともに静岡県や浜松市の独自性がアピールされている。

本シリーズがこれらの公演によって完結したあとに、どのような企画が本学と地域の特色を活かした「音楽行事」になり得るかは、今後検討すべき大きな課題である。さしあたって本年10月に名古屋と静岡で「アンコール・シリーズ」とでも言うべき、やや小さな演奏会シリーズが実現する。浜松市楽器博物館の歴史的楽器は使わず、出演者も「室内楽演奏会1~3」の主要メンバー3人のみであるため、上記3回の主旨を直接引き継ぐものではない。しかし、19世紀のピアノとともに生み出される音楽の愉しみを、本学が今後どのように(地域)社会に提供し続けることができるか、試金石となる催しである。歴史的ピアノを使っての本学のユニークな演奏会に対して、引き続き関係各位のご支援を乞う次第である。

小岩信治 (文化政策学部芸術文化学科)

甦る感動、奇跡のアリア

OPERA SHIZUOKA INTERNATIONAL OPERA COMPETITION

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

新春に相応しく喜歌劇『こうもり』の序曲で「オペラ・ガラ・コンサート」は幕を開きました。

本公演は第5回静岡国際オペラコンクール(主催:静岡県、静岡県教育委員会、本学、実行委員会ほか)のイベントとして開催され、会場のアクトシティ浜松・大ホールは全国から詰め掛けた1,500人以上のオペラファンの熱気で満ち溢れました。

大岩千穂(第1回最高位)、オアナ・アンドラ・ウリエリュ(第2回第3位)、パク・ヒョンジュ(第3回第1位)、ワンリー・ラデユク(第4回第1位)ら今やメトロポリタン歌劇場などの世界の主要歌劇場で活躍するコンクール入賞者と、体調不良のダイ・ユーキャン(第1回最高位)の代役として駆けつけたベテランの市原多朗(客演)が、東京フィルハーモニー交響楽団をバックに『椿姫』や『リゴレット』などのオペラアリアや重唱を高らかに歌い上げました。

本公演の音楽監督でもある伊藤京子コンクール審査委員長は、4人の入賞者が入賞時と比べて、あらゆる点でクオリティを高めていると満足されました。

また、本公演は静岡国際オペラコンクールの事務局を本学が担って初めてのイベントであり、本学らしさが発揮できるよう図りました。特に、

プログラム曲目解説は平野昭教授(芸術文化学科)が、ポスターなどの公式デザインはデザイン学部3年の松崎貴史さんが担当し、公演当日の受付やアナウンスなどの運営スタッフとしても多くの本学学部生・大学院生が携わり、制作運営における大きな原動力となりました。この経験を今後本学が運営するコンクール本番へと発展させていくことが期待されます。

本公演の成功により今秋のコンクールへの気運が更に高まってきました。世界を目指す若いオペラ歌手の歌声とともにコンクールを成功させ、静岡文化芸術大学の名を世界に向け発信すべき時がやって来ようとしています。



ものづくりは人づくり

望月達也(デザイン学部メディア造形学科)

静岡文化芸術大学では平成18年度からSUACデザインセミナーを毎年8月に開催しています。初回のデザインセミナーでは、「デジタルものづくり」をテーマに、ものづくりとそれを支えるコンピュータシステムについて取り扱いました。そこでは、本学が企業と共同・受託研究しているデジタルものづくりへの取組みについて報告しました。その内容は、書籍(千代倉 監修、望月、鳥谷 著、『XVLによるエンジニアリング Web3Dアニメーション入門』森北出版(2007)、pp.159-179)にも掲載されました。

デジタルものづくりが急速に発展している現在、ものづくりに携わる人材教育が重要な課題になっています。本年度は技能五輪大会が静岡県で開催され人材育成に高い関心が寄せられていることから、今年度のデザインセミナーでは「ものづくりは人づくり」をテーマに、次世代のものづくりを担う人材をどのように育成するか、デザイン教育・工業教育の視点からセミナーを開催しました。

セミナーは4つの部門で構成されています。まず、本大学の「産官学連携フォーラム部門」では、ものづくりへの期待と責任、ものづくりと教

育という二つのセッションで講演を実施しました。次に「テクニカルセッション部門」では、ものづくりのためのシステムを理解するためにシステム原理、理論、技法について専門の立場からそれぞれ授業を実施しました。また「体験部門」では、本学のコンピュータを活用して3D-CAD、3Dビューア、3D図面などについて演習的な授業を行いました。この授業ではe-ラーニングシステムを構築しWeb授業の可能性を同時に検証しました。社会人への専門教育はこれからの高等教育機関の重要な事項と考え、そのための方法や仕組みについて試行しました。最後の「展示実演部門」では、ものづくりを支えるシステムを見学していただきました。

デザインセミナーでは、「ものづくり」をキーワードに多くの人に参加していただき、ものづくりにおける人づくりの大切さを皆様にご理解していただきました。本年度から本学では「デジタルものづくり塾」を開講し浜松地区の中小企業の社員教育を支援する事業も実施しています。最後に、デザインセミナーにご協力やご支援いただきました自治体、団体、企業の皆様に心からお礼申し上げます。

編集後記

本学では昨年4月、川勝平太学長、上野征洋文化・芸術研究センター長が就任され、新体制の下で1年が経過しました。秋に静岡国際オペラコンクールの開催を控えた本年以降、文化・芸術研究センターも大きな転換期を迎えることとなるでしょう。様々なイベントや研究活動とともに、巻頭寄稿で戴いた川勝学長からのご期待にお応えすべく、変わり行く文化・芸術研究センターの姿にも是非ご注目下さい。(St)

Art & Culture

文化・芸術

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.7
April 2008

発行人: 上野征洋 編集人: 富田晋司
発行: 静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)



古紙配合再生紙及び大豆インクを使用しています。